

## 【書評】松田宏一郎『江戸の知識から明治の政治へ』

太田 仙一

本書は、徳川期から明治初期にかけての政治思想的課題の継承・変化・再定義のプロセスをたどる、著者の過去十五年にわたる諸研究論文を原型とした本年度サントリー学芸賞受賞作である。本書の目次は以下の通りである。

### 序

#### 第一部 統治エリート観における伝統と近代

第一章 「政事」と「吏事」——徳川期の統治と人材

第二章 朱子学・正学・実学——佐久間象山

第三章 エリート形成と能力主義の定義

第四章 福沢諭吉における知の「分権」

#### 第二部 アジア認識と伝統の再構成

第一章 「亜細亜」の他称性

第二章 「文明」「儒学」「ダーウィニズム」

第三章 「封建」と「自治」、そして「公共心」というイデオロギー

### あとがき

以下、各章ごとの内容と著者の主張をまとめる。

序では、研究の視角として、「近代化が要請する課題は西洋の諸社会にとって重く困難で複雑であり、同じように日本にとっても重く困難で複雑であったというあたりまえのことを、思想作品の中から具体的な論点に即してつかむ（1頁）、ということ、そして「西洋に起きていることが、それほど異常な理解しがたい事態ではないと気づいた知識人が複数存在した」（2頁）ということが指摘される。

そして、第一に徳川体制から明治新政府の確立への大きな政治的変動を背景として知識と思考能力がいかなる意味で統治者としての資質や政治指導の力量に関係すると考えられていたのかということ（第一部）、第二に近世後期から明治初期の知識人たちが日本社会の「伝統」とされる思考習慣をいかに定義し、固有の歴史と実体を有する存在としての「日本」がいかに構成されてきたかということ（第二部）

を課題として叙述を進めるとする。以下、各章ごとの内容と著者の主張をまとめる。

第一部第一章では、近世における統治人材育成と知的訓練の關係が扱われる。十八世紀末から十九世紀のイギリスにおいては、職務としての統治に対する需要が増加していた。丁度同時期の日本においても「政事」需要の増加へ対応するための動きが求められており、一種の共鳴状態が起っていた。その上でイギリスにおいては liberal な知という形で知的能力という資源の、政治世界における有用性・正統性を主張する事態が生じた。同様に日本においても、学問による判断力の向上を理由として政治資源としての学問の地位向上を求める動きがなされており（それに伴いうる弊害の可能性も認識されていた）、知識を政治人材の資源として評価する流れが日英の違いを問わず存在していたとする。

第二章では佐久間象山が扱われる。著者は佐久間を「あからさまに自己の知的卓越性と統治担当者としての能力が一致していることを主張した事例」（4頁）として取り上げている。そして佐久間の朱子学への固執の論理を分析し、佐久間にとって朱子学は「物」に即して「理」を究める精神的な緊張を要する方法論・知識と思考の構成そのものについての反省的方法として重視されるものであったとする（それゆえに安易な学問と政治の結合には自制的であった点も指摘される）。そしてそのような知の反省的方法としての学問（朱子学）こそが、実際の政治と結合する「実学」として意味を持つと主張していたと指摘する。

第三章では、知識・教養が政治資源としてどれほどの価値を持つかという発想の在り方を扱う。まずは近世における、知の役割（そして

その中での競争という概念の扱われ方）などが粗上にあげられる。その上で分析対象は十九世紀のイギリスへと飛び、J・S・ミルの言説を分析し、そこには有能な人材の統治機構への集中がもたらす弊害への危惧、という視点が含まれていたことを指摘する。そしてその様な議論は明治維新以降の日本においても福沢諭吉らによって継承されていることを指摘する（これは第四章へと継承される）。その上で明治期の人材論は最終的には旧体制哲学の残存ではなく同時代の西洋思想の輸入によって「道徳」「儒教」化されたと指摘する。

第四章では、福沢諭吉の「分権」概念を手掛かりに、知識と思考能力が広く社会に分散し競争的に高度化していくというヴィジョンの確立を扱う。まず、『学問のすすめ』における政府の職分論が分析される。そしてそれは、近世後期からの職分という議論（士農工商全てが自らの家業に専念し、他の職分との境界を意識しつつ全体として国家を形成するというイメージ）が下敷きになっていたことを明らかにする。そして福沢はこの時代に行われていた様々な地方分権論争に対して、『分権論』において「職分」領域の重層体としての「日本国」という論理を提示し、そのための地方分権を主張した。この国家像を福沢は、トクヴィルやミルといった西欧の思想家から直接論理を吸収したのではなく、近世以来の「公・私」観、「職分」観といった概念を西洋の思想作品と共鳴させる中で導き出したという点が強調されている。

第二部第一章では、「アジア」概念の導入と定義が与えた影響について分析がなされる。まず、儒学という枠組みを維持していた時代が持っていた、中国・朝鮮社会を他者としてとらえつつその他者性の意識を手掛かりとして日本社会にとつての儒学の正統性を検証しようとする。

いう知的緊張感が指摘される。そのような緊張感は、十九世紀後半に入り、「亜細亜」という呼称が定着する中でも、その「他称」性を意識するという形で現れた（それゆえにその時期の日清提携論にある種の戦略性が見られることも指摘する）。そして、福沢のいわゆる脱亜論も、日本がなぜ「亜細亜」に含まれるのか、という疑問を徳川期の思想的蓄積から継承している、という側面が存在していた。その後他称性への違和感は消え去っていく中で、安直な形で「アジア主義」が生まれていく。

第二章では、「文明」という概念が、近世日本の知的社会でどのように議論され、明治以降には西洋から導入された社会理論の理解と説明の中でどのように理解されたか、ということが扱われる。まず、徳川期の儒者達が、闘争的な原初の世界とそこからの離脱、という歴史的時間の始まり、それをもたらす断絶的契機へ強い関心を持っていたとする（そしてそのような断絶への意識は一部の国学者にも見られると指摘している）。そして、そのような人間の文明化を一つの驚異として受け止める視覚が、福沢ら明治初期の論者達にも継承されていたことを見出す。しかし、西洋からの社会的ダーウィニズム理論の導入は結果としてそのような文明への関心を欠落させる方向に働き、新しい人間・文明像の発見にはつながらなかったとする。

第三章では、「封建」という概念を通して、秩序と発展を可能にする日本「固有」の条件の定義付けが最終的にステレオタイプに陥るまでの経緯を扱う。近世社会において封建は、士民・君民による責任感の共有をもたらす側面を持つものとして認識されていた。それは、明治期には地域の「独立心」といった形で読み換えられ継承されていた。「封建」の記憶は、国民の公共的関心・自発性を効率的に引き出

しうる、日本固有の歴史的蓄積であるという認識が定着していくに至った。その後その論理は時に地方改良運動の推進に、植民地を得た後は朝鮮・中国の社会への批判や軽視への論理に、そして昭和期の農村更生運動推進の論理へと適用されるに至った。近代日本の「封建」概念は、社会・歴史の理解を深めるものではなく、それ自体が反復・再利用されるイデオロギーとして存在することになった。

あとがきでは、「問題をめぐって噴出した多様な発想と論理がぶつかりあう場にあらわれる摩擦や矛盾の在り方そのもの」(283 p)への関心、という視角が提示され、著者がこれまでの思想史研究の風潮に対して抱えてきた違和感とそれへの取り組みが語られる。

以上、雄大なテーマに対して大上段から切り込む知的刺激に富んだ研究である。本書を貫くもっとも重要な視点の一つは、近世思想との連続性を意識して明治期の思想理解がなされている、という点である。この視点については、早くから関心が持たれ、前田愛にはじまり近年では坂本多加雄『市場・道徳・秩序』（創文社、一九九一年、後にちくま学芸文庫）に至るまで、多くの研究が試みられている。しかし、ここまで一貫して自覚的な方法論を以て描かれたのは、これが最初であろう。同時期の英国との比較という視覚を踏まえつつ、思想家・知識人による発言がなされた時期の社会・言論状況にも幅広く目が配られているという点も、本書の学術的価値を高めている。

本書において、最も大きな存在感を示している思想家は、福沢諭吉である。第一部第二章以降、全ての章において何らかの形で福沢の言説が分析対象に上っている。そして、その福沢を正面から分析した第一部第四章は、多くの評者達が本書の一つのクライマックスと見る点

で一致している。近世の伝統の流れに位置する職分論が、西洋の人材論と呼応しつつ福沢の地方分権論につながっていくプロセスを描く論理は実に説得的・示唆的と言えよう。本書は、福沢研究としても、一つの最高峰を示したものであると言える。

また、第一部第一章・第三章においては、十九世紀の日本が直面していた問題が、決して特殊なものではなく、西洋においても共鳴するかのように似たような問題が発生していたということ、そして日本において統治にまつわる諸問題は決して西洋との接触以後に突然発生したものではなく、それゆえにミルなどの西洋の思想家の議論をより深いレベルで理解する下地になったということを示す点を通して、本書の論点をより豊かなものにしていく。

本書から窺えるのは、福沢、そして第一部第二章で異彩を放った佐久間象山に代表されるように、「近代化が要請する課題」に誠実に向き合い、「西洋に起きていることが、それほど異常な理解しがたい事態ではないと気づいた」(2p) 思想家たちに高い評価を与えている点であり、本書において行われる彼らの丁寧な言説分析は、その評価が深い説得力を持つものである、という印象を与えてくれる。ただし、それと裏返しに窺えるのは、「その後」の時代の知識人・思想家達への距離感のある評価である。「明治以降の思想家の多くは、思考過程で発生する違和感やすわりの悪さを丁寧かつ適切に表現することがあまり上手くない」(8p) という印象的な言葉が象徴するように、第三章の末尾において、より豊かな人材論を提示しうる可能性を持っていた植木枝盛が安易な道徳論に移行する様を描写する筆致、そして同じく中江兆民が「唯一の確定的な解決への憧憬」を抱くに至る過程を描きだし、近世以来の豊かな人材論が皮肉にも西洋思想によって道徳

化・儒教化していく様の描写は印象深い。ただし、この流れについてはやや早急な印象も受ける。植木・中江らの言説そのものをより慎重に分析した上で評価すべきである、という意見も当然浮上するであろう。

明治以降の思想家への冷やかかともとれる評価、は第二部においてさらに顕著となる。「徳川期の思想は古めかしい教養がただ目錄的に保存されていた倉庫ではなく(中略)、意識的に参照するにたる思想の蓄積」(6-7p) であつたという視点の下で、近世と近代の思想的継承・断絶というテーマがより前面に出てくる。そしてそれゆえに、近世の思想家たちの豊かな発想と比較した際の、明治以降の思想家・知識人の物足りなさが浮き彫りとなってくる。

第二部第一章において、徳川期の儒学者達が朝鮮・中国との差異の自覚に強い意識を持っていた点、そしてそれは後に「亜細亜」という概念そのものを安易に受け止めることを自制する態度につながつたという点を明らかにしていく過程は極めて説得的である。しかし、その後のおわりに、でのいわゆる「アジア主義」が生まれてくる過程についての記述についてはもう少し丁寧な説明が必要ではないだろうか。「日本内的自己意識」への無邪気な執着に抵抗できる知的体力が、明治以降の日本の知識人にどれだけ継承された(されなかった)のか(181p)、という鋭い問題意識へ解答するには、現実の政治家の発言・行動も含めて「アジア主義」を主張した人々の内在的論理を把握する必要がある。近代日本を長く拘束してきた「アジア主義」への理解を深めるためにも、近世以来の蓄積との断絶はまだ検討する余地があるのではなからうか。

第二章においても、同じ傾向は見られる。「文明」と「野蛮」の隔

絶という状況への意識の高さ、ということへの徳川期の知識人たちの強い自覚が魅力的に前半部で描かれる一方で、進化論などの西洋的議論の導入が結果として豊かな可能性を失わせるという指摘、そして同じく第三章において「封建」という近世以来の概念が結果として安易な国民動員のイデオロギーに堕していく過程を描きだすプロセスは極めてスリリングにして魅力的である。だが、「参照するに足る思想の蓄積」が最終的に西洋の概念と出会う中で、十分な形で継承されていないのはなぜか、という根源的な疑問を抱かされる。

しかし、この様な点は、そもそも簡単に答えが出る類のものではなく、教育・社会状況などの幅広い視点・そして大正・昭和をも視野に入れた幅広い時代スパンからの検討を必要とするものであり本書の紙幅に留まるものではない。むしろ、このような大きく答えの出しにくいテーマに対して安易な解答に走らずに誠実に向き合い多くの興味深い視点を提供した著書の深い思考を証明しているものであり、本書は思想史研究の新たな段階を画する研究成果であるといえよう。

著者は別の論考において、福沢は文明化には人心が信じられる物語が必要であると考へ、日本の伝統に多事・自治・公共心が組み込まれ存続しておりそれが日本の文明化の足掛かりになるはずだという虚妄に賭けたとしている。そして福沢の誤算はその後の知識人が安易にそのような虚妄にのめり込んでしまったことだ、としている。今後は、その様な知識人たちの在り方をもう一度見直すことも重要な研究の課題となろう。そして、本書を読めば、著者がそのような安易な物語に乗らずにいかに誠実に福沢が作った問題と向き合ってきたかという、「その後の知識人」・研究者としての矜持がよく分るだろう。日本思想史研究の一つの大きな指針となるであろう本書の刊行を心から喜びたい。

(ぺりかん社、二〇〇八年)

(1) 五百旗頭薫氏・苅部直氏・猪木武徳氏の評である。

(2) 松田宏一郎「江戸から明治へ」『大航海』六八号、119～125 p、二〇〇八年